

(61) 小百(おびやく) 鉱山跡一追探査

9年ぶりに現地を再訪した。若干の資料、新探査器を持参しての再訪である。より分かり易く現地を紹介することができよう。

現地は現在でも車が横付けできる鉱山跡である。付近一帯には貧相な鉱石が点在している。が、現在でも旧坑などからの漏水を処理している施設が稼働していることに少し驚いた。又、山中には9年前にはなかった新しいコンクリート製の排水路も設置されていた。鉱山廃水の処理が何十年にもわたって継続されていることになる。著者は、少なくない鉱山跡を本探査記で紹介しているが、排水処理施設があり、現在でも稼働中である鉱山跡は記憶にない。ということは、小百鉱山の坑道からの漏水はかなり深刻な負の遺産として残されているものなのかも知れない。

現地は夏は草木が生い茂って見晴らしが悪いが、草木が枯れ、落葉した時期には、結構見晴らしが良くなる。主坑道口前の広い河川敷には木々が生い茂っているが、かつて大規模な鉱山施設があったようである。じっくり歩き見学するのも良い。又、転石も結構落ちてもいるし。

2019年7月

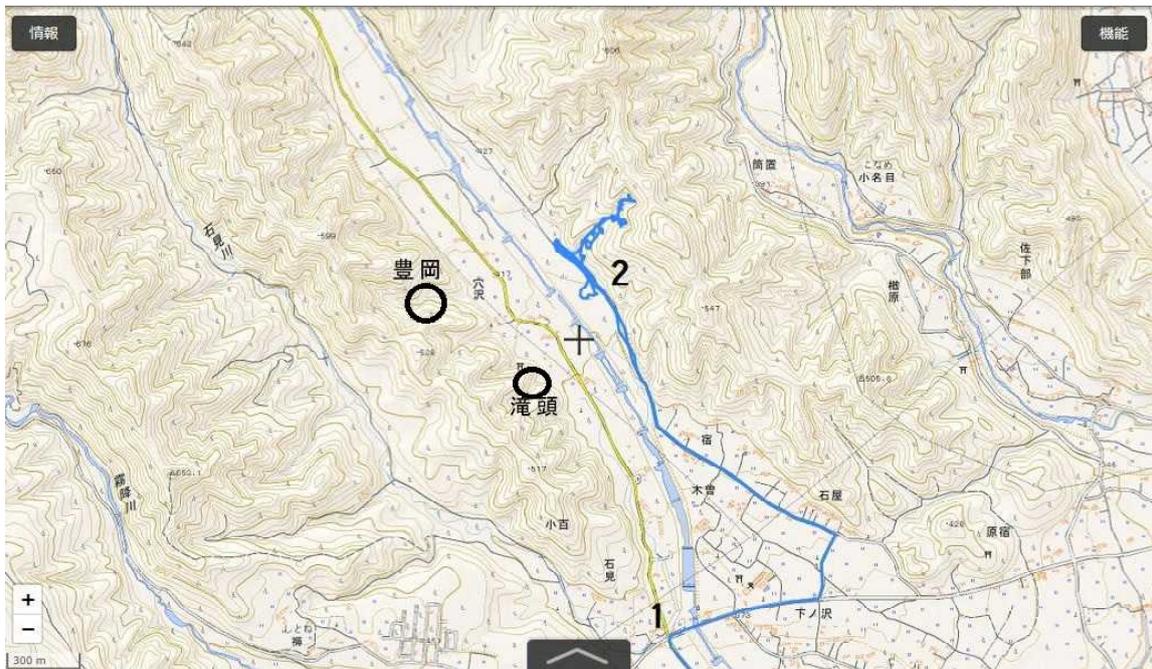


図1 青色曲線でガーミンで測地した経路を描いている。番号1は今市から245号を北上してきた小百交差点である。番号2の先まで現在でも車で入っている。参考のために、図中に、本探査記で紹介している既探査の鉱山「豊岡鉱山」と「滝頭鉱山」の位置も記入しておいた。

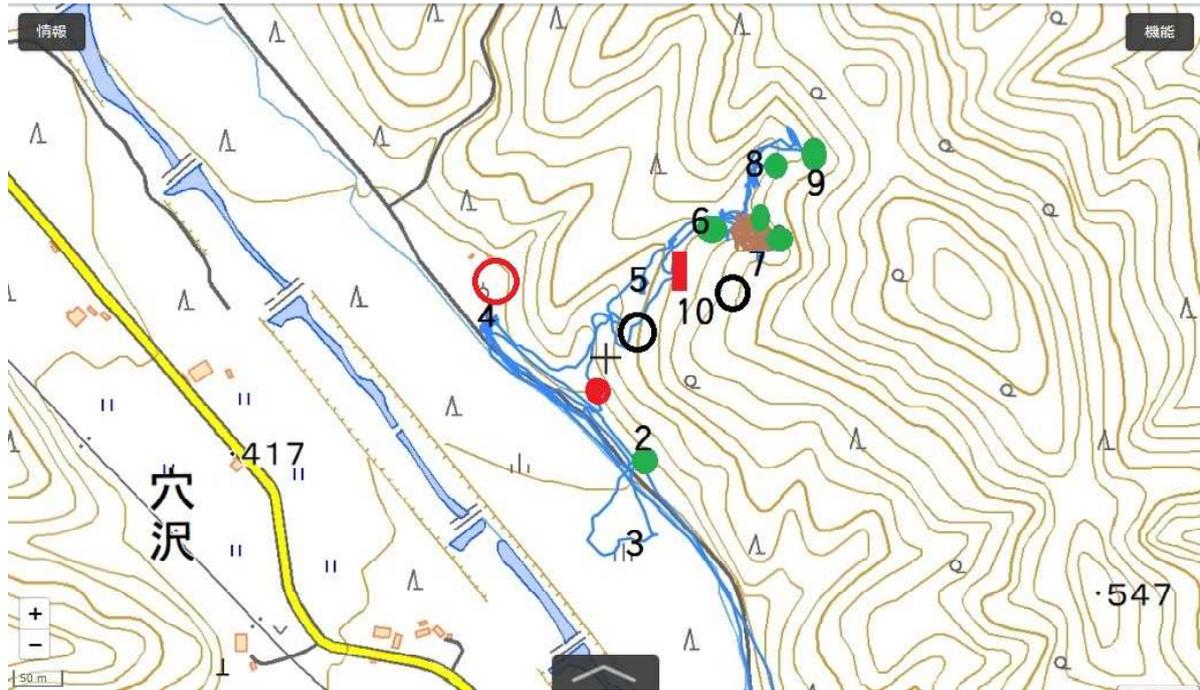


図2 図1の部分拡大図。番号は後掲の写真に対応させている。茶色ベタは明瞭なズリ跡。緑丸は坑口跡、赤色棒は石碑。主林道脇の塗りつぶし赤丸の所には多段の石垣組がある。鉱山施設があった場所と思われる。また赤の箇所には図4と対照すると、建物があったようである。半場跡か。2つの黒丸は、図4に示している鉱山図で示されている2つの坑口位置を、現在の地形図中に転記したものである、探査要の場所として。

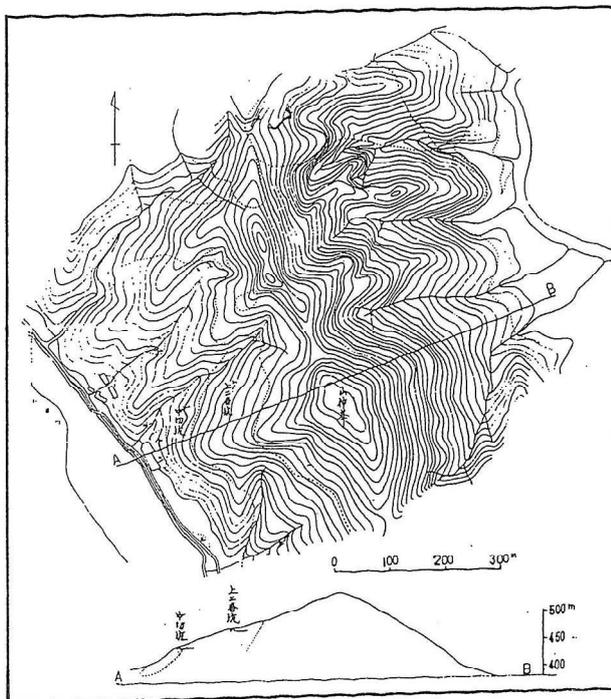


図9-2 小百鉱山坑内外関連図
(高島 清 ほか, 1955)

図4 参考文献(2)より複写掲載。線分A-Bの左側少し上に2カ所に坑口が記載されている。「中切坑」と「上二番坑」と読める。これに記されている2つの坑口を図2に転記したのが、図2中の2つの黒丸である。東西に流れている沢の左岸上部にある。今回このあたりを注意深く探査したが、現地はなだらかな森林斜面であり、坑口跡らしい痕跡は全く見つけられなかった。番号10付近に古い石碑を見つけただけである。

参考した文献は、それなりの職能のあった人の書いたものであり、信用度は十分にあるのであろうが、そのような文献でも、私には??と思われる場合が鉱山探査で当てにした資料中でよく出くわしている。今回の場合も??の部に入っているのかも知れない。

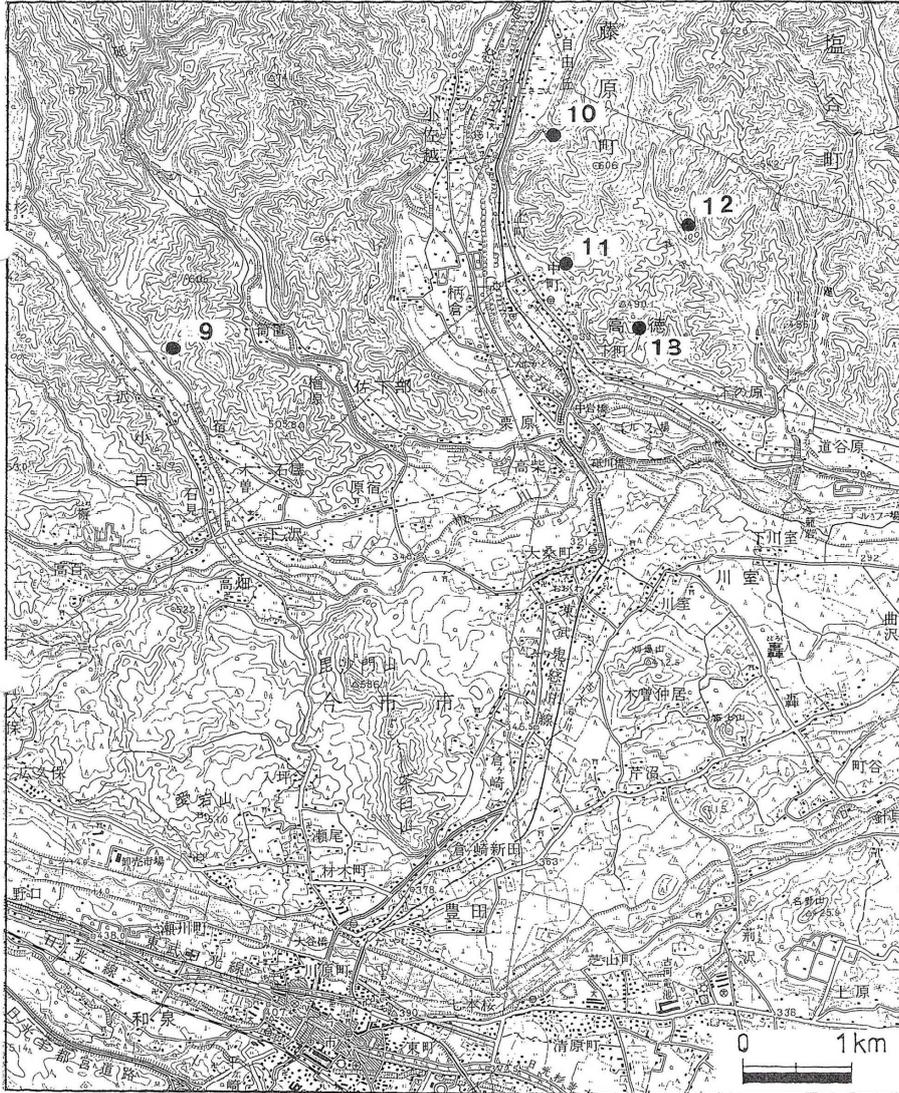


図9-1 小百(9)、南沢(10)、豊徳(11)、高田高德(12)、久富(13) 鉾山位置図
 国土地理院5万分の1 日光(S56)

図3 参考文献(2)より複写掲載。南沢(10)、高田高德(12)は本探査記で既報である。豊徳(11)、久富(13)は付近に民家が密集しているの、未探査である。やはり、民家の近い当たりをうろつき回っているのと、不審人物と思われそうなので。また、古い鉾山跡については、現地近傍の住民さえ知っていない場合が殆どである。が、ほんの希に教えてもらえる人も、80才から90才以上の高齢者である。



小百鉾山跡をグーグル・アースで覗く。番号は図2の番号と対応している。番号3の右側の水色の3つは沈殿池、左側には正方形の潤れた沈殿池らしいものがある。

鉾山跡写真



番号 2-1 主林道から東方を見る。林道水準で、コンクリート擁壁その他で、坑口跡は確りと遮蔽管理されている。他の坑口跡との配置関係から、これは「通道坑」と著者は判断したが。



番号 2-2 上記坑口跡の対面。広い河川敷への入り口である。うっそうと木々が茂っている。



番号 3 番号 2 のゲートの左側から入っていく。前方は進入禁止の管理区画となっており、薄青緑色のプールが幾つかある。沈殿池か。坑口跡からの漏水を管理処理している施設と思われる。水の色からすると銅イオンが多いのかも。

この池は Google Earth でしっかりと確認できる。



番号 4 ここに車を駐車し、目の前の支林道に入っていく。スカ石だが、鉾石の転石が少なくはない。直ぐに立派なコンクリート製の排水路に出会う。



番号5 林道を進んで行くと、9年前にはなかった「新排水路」に出会った。なぜ?? この上流にはいくつもの坑口がある。未だに漏水の管理を行わなければならないことを示していると思われる。



番号6-1 坑口跡の1つ。土嚢を積み上げて確りと閉塞している。



番号6-2 新排水路脇に草木が殆ど伸びていない、と言うことは、定期的に除草をしているのかも知れない。山道は数年も手を入れなければ雑草・灌木だらけとなる。



番号7 坑口跡の1つ。これも土嚢で確りと閉塞されている。



番号8 これも坑口跡の1つ。
これも土嚢で確りと閉塞されている。



番号9 これも坑口跡の1つ。
これも土嚢で確りと閉塞されている。
以上の坑口跡は9年前に確認済みである。



番号10 今回の探査で見つけた明治40年建立の石碑。
表面には「大???'の記銘があり、「大」の文字しか分からなかった。時代的、場所的に考えると、鉱山に関係した石碑と思われるが？

参考文献

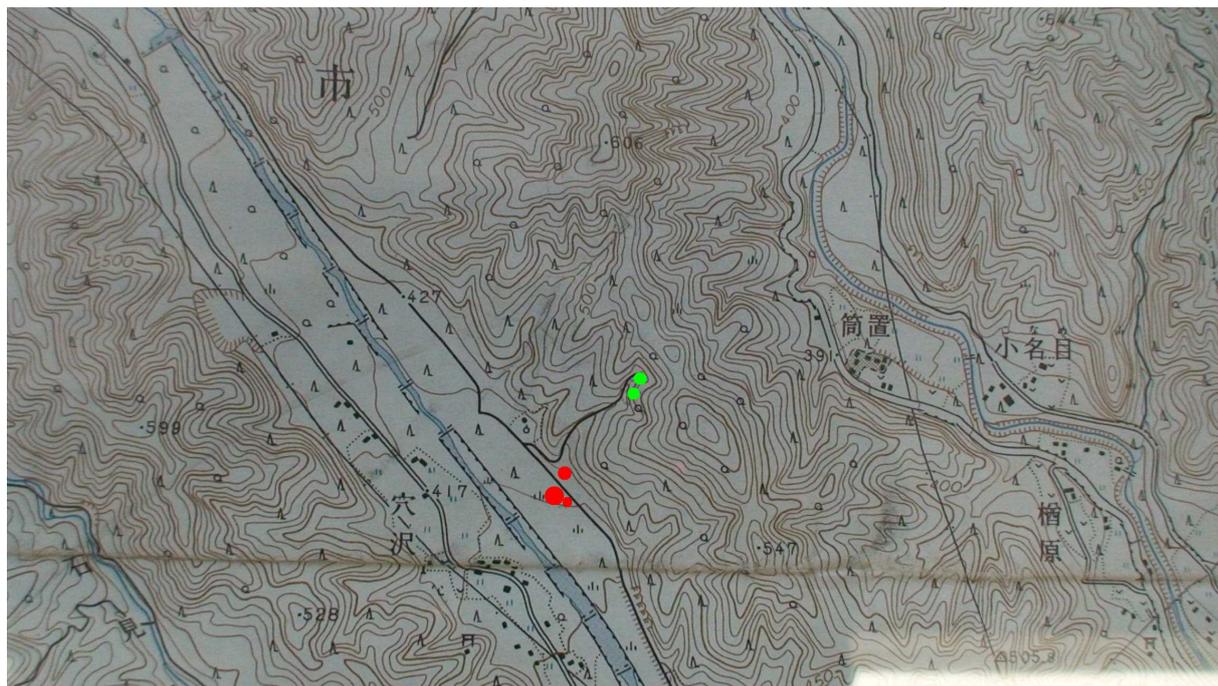
(2)「日本金山誌 関東・中部」、社団法人 資源・素材学会、1994年。

(61) 小百(おびやく) 鉦山跡

栃木県日光市小百地区にある。参考文献(1)によれば、「・・・木戸ヶ沢鉦山の西南延長に当たる。・・・」 主要鉦石は木戸ヶ沢鉦山と同じようであり、黄銅鉦、黄鉄鉦を含む含金石英脈、閃亜鉛鉦、方鉛鉦。

今市から121号を北上し、栗原の121号の分岐点で左折する。高柴、原宿の方へ進んでいく。原宿の先、下ッ沢のところで、学校の大分手前のあたりで右側の道へ入り、石屋、木曾、宿へと進んでいく。その内、林道は小百川に沿って北北西方向に伸びていく。下ッ沢から約2kmで、地形図中に記載されているように、本線林道の右に分岐林道が伸びている。この所を少し戻ると、鉦山施設跡がある。赤丸印の所である。この辺りに駐車できよう。車から降りて、右の分岐林道を登ろう。入り口当たりから鉦石らしいものがちょこちょこ落ちている。現在では林道は途中で消えて、先は枯れ沢のようになっている。転石も転がっている。とにかく地形図中の林道線に従って登り詰めると、右側に大きな岸壁がある。坑口跡らしいものも幾つかあった。地形図中の緑色の所である。

実は、この坑口跡は、後述する旧地形図中の鉦山位置とは大分離れている。



地形図1 赤丸が鉦山施設跡。緑色が坑口跡

地図 国土地理院2万5千分の1地形図「鬼怒川温泉」

調査日 2010年4月、その他の日

参考文献

(1)「日本地方鉦床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、1973年。



地形図2 昭和27年5月発行5万分の一「日光」より

地図の中央「穴澤」の文字から北北東方向に「鉤山記号 どう」が記載されている。号の先にある山の頂上と鉤山記号との位置関係からすると、1枚目の地形図で示した鉤山跡と全く一致していない。この旧地形図を案内に、沢に林道があったので登り詰めてみたが、何ら鉤山跡らしいものを見つけることはできなかった。また沢の転石を探したが、鉤物転石は探し出せなかった。草木が枯れた時期に再探査を行いたいと考えている。

鉤山跡写真



写真1

前方左側に伸びているのは本線林道である。中央右側に分岐林道がある。現地形図の通りである。この分岐林道を登っていく。登り口当たりから鉤石の転石が落ちている。



写真 2

分岐林道を登り詰めた場所。左側上下に、排水溝が伸びている。右側上方に大きな岩盤がある。

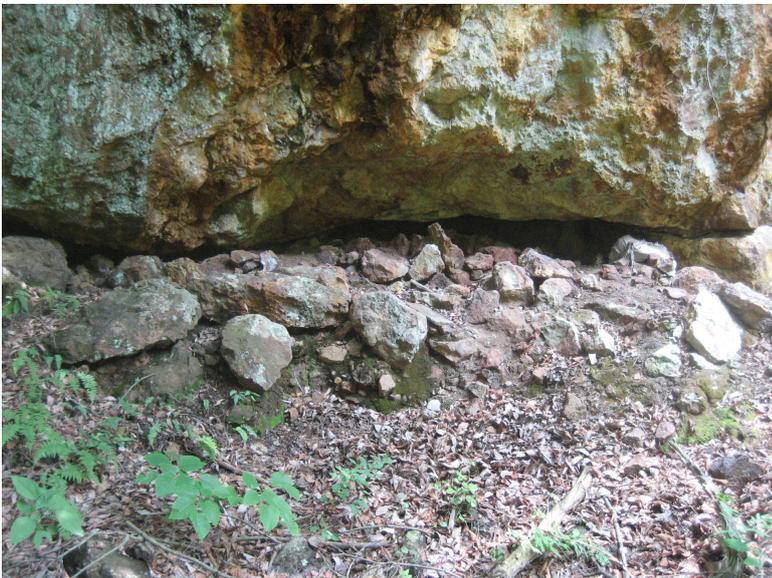


写真 3

その岩盤の 1 箇所の様子。閉塞された坑口跡のようである。



写真 4

本線林道脇の鉱山施設。閉塞した坑口のようである。構内からの鉱山水を引き出していた。パイプをたどっていくと、後述の処理施設に行ける。



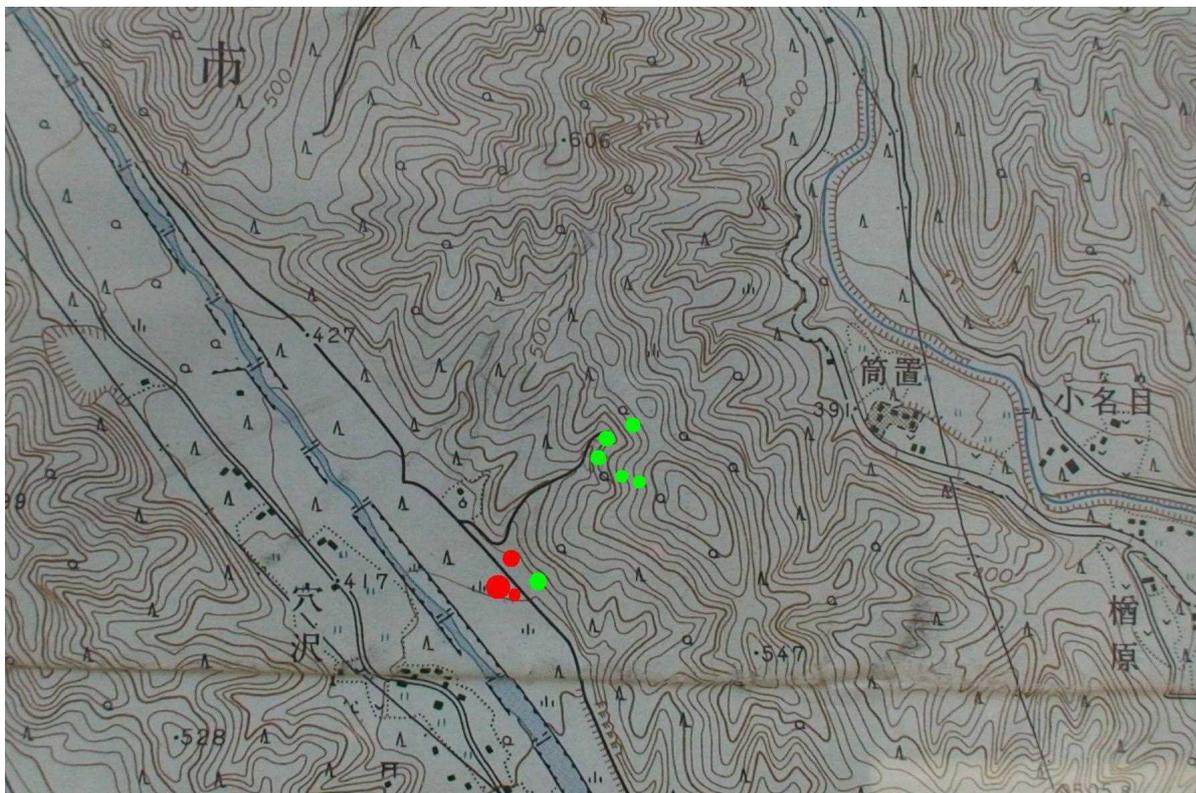
写真5

前述のパイプの行き着いた先。沈殿装置のようである。先の方に、幾つかの沈殿池がある。このあたり一体の原っぱが、鉱山施設跡のようである。鉱石を採集することができる。

採集鉱物写真

黄銅鉱、黄鉄鉱、閃亜鉛鉱、方鉛鉱らしいは採取できた。大した物ではないので、写真は未掲載とする。。

追記 冬になり、草は枯れ、木々は落葉して、山林の中も見通しがきくようになった。前掲の地形図2（昭和27年の古地形図）中に記載されている鉱山記号を目指して探査を行った。現地地形図と対比すると、標高606mの頂上の南南西方向で、標高500mから550mのあたりと見て探査を行ったが、何らの鉱山跡らしいものは見つけることができなかった。あたりの沢にも鉱石の転石も見つけれなかった。探査方針を変更して、地形図1中の鉱山跡を目指した。新たに幾つかの坑口跡を見つけた。地形図3中で、追記している。



地形図3